

混沌における生の諸相

— H.v.Kleist の『聖ツェツィーリエ、
あるいは音楽の力』試論 —

南 勉

I

クライストの作品『聖ツェツィーリエ、あるいは音楽の力』の決定稿は、1811年に物語集第二巻に収められた。クライストは友人A・ミュラーの娘ツェツィーリエのために、名付け親のプレゼントとして初稿を創作し、1811年11月15日から17日まで自ら発刊していた「ベルリント刊新聞」に掲載している。この稿は、量的には決定稿の1/3足らずでまた筋も単純であり、宗教の勝利というテーマにのみ力点が置かれている。当時のプロイセンでは財政が逼迫し宰相ハルデンベルクが先頭に立って改革を断行していたが、1810年の勅令によって教会領地及びその財産は没収されることになった。この勅令は旧教徒を激怒させたにとどまらず、新教徒の間でも著しい不興を買った。このような状況を念頭においてこの一稿を考量すると、そこには当時のプロイセン政府の政策に対する厳しい批判が控え目な筆致で描出されていると理解できる。ところが決定稿の場合には、第一稿をふまえて叙述されているにも拘らず、宗教の勝利はメインテーマになっていない。また四人の兄弟の母親の登場によって、決定稿は質的にも量的にも第一稿とは全く異なっている。事件を叙述した後、母の登場によって事件の報告及び解釈が何人かの報告者によって提示され、作品世界は徐々に相対の相の下に置かれてゆく。その結果宗教の勝利はかすんでしまい、第一稿に大きく反映していた政府の政策に対する批判も全く影をひそめている。報告者の報告は、作品世界をますます複雑不可解にし、生の混沌における諸相を浮き立たせている。

この小論において、筆者は分析を決定稿に限定する。そしてまず事件と作品の背景について分析する。次に報告者の報告を分析することによって、報告者の意識と発想を解明しつつ、聖ツェツィーリエと音楽の力について考究する。そして窓バラと暗雲という形象の象徴性を明らかにする。当該作品の

タイトルはクライストの他の作品に例を見ないような長く二者択一的なものであるが、これについて筆者の解釈を提示した後で、作品世界の根源である〈Gewalt〉と混沌における生の諸相を概観してみたい。

II

当該作品は、事件とその報告及び解釈から構成されている。前者は作品の1/3を、報告及び解釈は2/3を占めている。ここではまず事件とその背景にスポットを当ててみよう。

作品の舞台は、16世紀末のドイツの市アーヘンである。16世紀と言えば、ルターと宗教改革の時代である。当時のドイツはルターの宗教改革と反宗教改革の波に翻弄され、新教徒の間にも激烈な対立が生じ、やがて30年戦争が勃発してドイツの国土は焦土と化し、人口は激減した。作品に設定された時間は、16世紀末から宗教戦争が終わる1648年までのおよそ60年である。事件の背景は旧教徒と新教徒の対立である。

事件の主人公である四人の兄弟は、16世紀の末のある日アーヘンの市で再会した。長兄はアントワープで新教の副牧師を務め、他の三人はヴィテンベルクで勉強している学生である。ヴィテンベルクは当時ルターが教鞭をとっていた市であるので、四人は完全な新教徒と理解できる。兄弟は面識のない伯父からの遺産を相続するためにアーヘンに参集したが、依頼できそうな人士もなく事はうまく運びそうにないままとある宿に投宿する。この遺産相続という目的は極めて世俗的であるが、これについては以後一切ふれられない。兄弟は副牧師からオランダで猛威を極めた聖像破壊運動について話を聞き、偶然聖体祝日に聖ツェツィーリエ僧院で祝祭が挙行されることを知った時、「熱狂と血気とオランダでの前例」¹⁾に勇気づけられて、はからずも聖像破壊を執行しようと決意する。この決意の動機についてはいささかも述べられていないが、作品の背景から推測できる。

Der Prädikant, der dergleichen Unternehmungen mehr als einmal geleitet hatte, versammelte, am Abend zuvor, eine Anzahl junger,

1) H.v.Kleist: WERKE UND BRIEFE(以下Kleistと略記),C.Hanser Verlag München 1977 Bd.2s.216

der neuen Lehre ergebener Kaufmannssöhne und Studenten,
welche, in dem Gasthofe, bei Wein und Speisen, unter
Verwünschung des Papstums, die Nacht zubrachten;...(216)

兄の副牧師はこの種の企てに一度ならず加担した経験がある。また集まった人々は秘かに新教に心を寄せる商人の息子たちや学生であり、法皇政治を烈しく呪っている。この引用から、作品の背景をなす対立がいかにも熾烈か理解できる。このような意識は、ひとり青年たちのみに限定されず、市の治安を司る皇帝の士官ですらも「自ら法皇政治の敵であり、そのために少なくとも秘かに新教に好意を寄せて」²⁾いる。旧教体制に対する新教徒の憤激は著しい。新教徒の集団は、旧教徒に比べその教義にふさわしく個別的であり、確固とした組織的基盤に依拠していない。その構成員は全て男性であり、行動は極めて破壊的である。

旧教側はこのような風潮を敏感に察知し、その対応は新教側とは異なり組織的である。旧教側の構成員は全て女性で、その対応は外観上決して破壊的ではない。尼僧たちは、不安におののきながらも院長の指揮の下暴力的企図に対して調和的な音楽で対応する。

In den Nonnenklöstern führen, auf das Spiel jeder Art der Instrumente geübt, die Nonnen, wie bekannt, ihre Musiken selber auf; oft mit einer Präzision, einem Verstand und einer Empfindung, die man in männlichen Orchestern (vielleicht wegen der weiblichen Geschlechtsart dieser geheimnisvollen Kunst) vermißt.(217)

尼僧たちは、ありとあらゆる種類の楽器に習熟して演奏曲を演奏する。そしてその演奏には、「男性の楽団にはない精確さと理解と情感」がある。あらゆる類の破壊道具を手にした新教徒の群と比べると、彼女たちがいかに調和的で非暴力的か明らかである。ところでこの楽団の指揮を執ることになっていたアントニアは、「数日前から激しい神経熱を患い」、「完全に人事不省に陥り、予定の楽曲を指揮することはおよそ考えられない」³⁾状態にあっ

2) ebend.s.217

3) ebend.s.217-18

たが、祭典の直前に突然「少し青ざめた顔色こそしてはいたものの、生き生きと元気な姿で」⁴⁾登場する。これは実に奇怪なことである。しかし、彼女の登場によってそれまで不安と動揺の極にあった尼僧たちは、水を得た魚さながらに活気づき、演奏中「僧院にいる人々はあたかも死んでいるかのようであり、四人の瀆神的な兄弟とその一味がいるにも拘らず、床の上の塵さえ動かなかった」⁵⁾のである。

アントニアは、実に不気味な神がかり的な存在である。彼女の病気からの回復と同夕の突然の他界について、テキストは因果律的な問いを拒んでいる。また、ミサ曲の演奏後に言語を奪われて狂態に陥った兄弟についても事情は異ならない。ここに当該作品の〈聖徒物語〉としての特性がある。クライストは、〈聖徒物語〉という枠付けの下に、聖なる世界への侵入を拒んでいる。その結果、Gewaltの世界がにわかには浮き上がり、聖なる世界は後退している。ここに謂う Gewalt とは、最高の力であると同時に破壊的でもある二元的な魔力のことである。⁶⁾

III

作品の語り手は、事件について詳述した後各報告者にそれぞれ報告と解釈を提示させているが、事件の全体像にふれようとはしない。ここでは四人の兄弟が収容された病院の管理者たちの報告を仔細に検討してみよう。

事件の六年後、兄弟の母親が彼らの消息を求めてアーヘンに登場する。その時アーヘンの市民たちは、事件をすっかり忘れている。しかし母親の努力と調査によって事件の糸口がときほぐされ、息子たちが市の精神病院に収容されていることが判明する。母親がその病院を訪ねた時、彼らは磔刑像を置いたテーブルに着席して合掌しながら祈りを捧げていた。この光景は、母親にとって全く異様であり、ここから以前の彼らのおもかげはおおよそ想像できない。病院の管理者たちは、この光景について「兄弟はただ救世主の栄光を讃えており」、「救世主こそ唯一なる神の真の息子であることを他の誰より

4) ebend.s.218

5) ebend.s.219

6) H.Kraft: ERHÖRTES UND UNERHÖRTES, W.Fink Verlag
München 1976 s.124

もよく理解していると信じています」⁷⁾と述べている。兄弟はまるで旧教徒そのものであるかのようであり、以前とは正反対の状態にある。彼らはまた、管理者たちの報告によると「六年この方このような幽霊じみた生活を続け、ほとんど眠らず気晴らしもしないままであり、また片言隻句も彼らの口の端にのぼってこない」⁸⁾状態である。このような生活は、修道僧さながらの苦行のそれであり、かつて投宿した宿で鯨飲馬食していた姿と比べると全く対極的であり、まさしく狂態としか形容できない。加えて彼らは言語まで奪われている。このために彼らとの対話は不可能である。

...; daß sie sich bloß in der Stunde der Mitternacht einmal von ihren Sitzen erheben; und daß sie alsdann, mit einer Stimme, welche die Fenster des Hauses bersten machte, das gloria in excelsis intonierten. (220)

四人の兄弟は、「深夜に一度だけ寝所から起き出して、病院の窓も割れんばかりの声でグロリア・イン・エクスツェルジスを」歌っている。このグロリアは、事件の時に演奏されたミサ曲で、神を讃える栄光誦である。彼らの行動は、奇怪で無気味である。「窓も割れんばかりの声」という表現からわかるように、彼らの歌声は身の毛もよだつようなすさまじい声である。彼らの歌には尼僧たちの歌に体现された諧調はいささかも感じられない。そしてそれは絶対的な不協和であり、調和からはほど遠い。⁹⁾これはまさに音楽の Gewalt である。この不協和な歌は、兄弟の狂態を傍証しているかのようである。

病院の管理者たちは、他方この兄弟を肉体的には完全に健康と判断し、彼らの中に「まじめで厳やかな性質のものではあれ、ある種の明るさ (Heiterkeit)¹⁰⁾」を認知している。これは不思議な認識であり、注目すべきである。この「ある種の明るさ」は、彼らの聖徒性をそれとなく示唆している。

管理者たちの報告は、病院関係者らしく実に細かい。しかし、彼らは兄弟の過去や狂気の原因などについて一顧だに与えようとしなない。彼らの報告や

7) Kleist, a.a.O., s.220

8) ebend.

9) H.Kraft, a.a.O., s.120

10) Kleist, a.a.O., s.222

解釈は、一貫して兄弟の現在の状態に制限されている。¹¹⁾

IV

Veit Gotthelf 氏は、事件に直接関与した重要な現実の目撃者である。彼は、事件の後結婚して数人の子供をもうけ、父の家業を継いで織物商人として生活している。Veit とは悪魔の同意語であり、敬虔な名前 Gotthelf は墮落した Veit という名前と結合している。¹²⁾ この氏名は、彼の二面性と転身をそれとなく暗示している。

Veit 氏は訪ねてきた兄弟の母親の用向きを理解すると、ドアに鍵をかけて「あなたが私を法的審問に巻き込むつもりでないのなら、包みかくさず率直に告白いたしましょう」¹³⁾ と述べている。この発言から明らかなように、彼は過去の無謀な行動を後悔してその発覚を秘かに恐れている。ここに彼の立場と発想がおのずと発露している。

Veit 氏にとって、周到に準備した企図がなぜ突然いともたやすく挫折したのかは不可解である。しかし、彼はその原因が音楽にあると認識している。彼は、「あなたの御子息方は、奇妙にも音楽が始まるとすぐに、いっせいに帽子を脱ぎました。彼らは名状し難い感動にひたっているかのように、伏せた顔にやおら両手を当て、副牧師は感動の一瞬の後ふりかえって大きな恐しい声で、私たち一同にすぐに帽子を脱ぐようにと言ったのです」¹⁴⁾ と述べている。この時点で聖像破壊に加担した人々はリーダーを失って四散し、また兄弟は夕刻になっても投宿していた宿に帰宅しない。

Aber wie schildere ich Euch mein Entsetzen, edle Frau, da ich diese vier Männer nach wie vor, mit gefalteten Händen, den Boden mit Brust und Scheiteln küssend, als ob sie zu Stein erstarrt wären, heißer Inbrunst voll vor dem Altar der Kirche darnieder-

11) L.Hoverland: H.V. Kleist und das Prinzip der Gestaltung, Scriptor Verlag 1978 s.190

12) K. Müller-Salget: Das Prinzip der Doppeldeutigkeit in Kleists Erzählungen, in KLEISTS AKTUALITÄT, wissenschaftliche Buchgesellschaft 1981 s.183

13) Kleist, a.a.O., s.221

14) ebend.

gestreckt liegen sehe! (222)

兄弟は夕刻になっても相変らず合掌したまま胸と頭で大地に口付けをし、まるで硬直して石にでもなったかのように狂熱にあふれて僧院の祭壇の前に腹ばいになっている。この光景は実に異様であり、これを目のあたりにした Veit 氏の驚きは想像に難くない。この時点で兄弟は完全な狂態にあり、かつての彼らのおもかげは消失している。彼らは宿に連行された後も、狂った旧教徒さながらに十字架の前で黙然と合掌し、一心不乱に祈りを捧げている。彼らは食事には手もつけず、また隣室に敷かれた寝床に目もくれない。そして、深更身の毛のよだつような声で突然グロリアを歌いはじめる。

So mögen sich Leoparden und Wölfen anhören lassen, wenn sie zur eisigen Winterzeit, das Firmament anbrüllen: Die Pfeiler des Hauses, versichere ich Euch, erschütterten, und die Fenster, von ihrer Lungen sichtbarem Atem getroffen, drohten klirrend, als ob man Hände voll schweren Sandes gegen ihre Flächen würfe, zusammen zu brechen. (223)

Veit 氏は兄弟の歌うグロリアを、凍てついた冬の夜空に向かって吠える豹や狼の咆哮に喩えている。兄弟のグロリアは、神を讃える尋常な歌とは決して言えない。彼らが歌い始めた時、「家の柱という柱はぐらぐらとゆらぎ、窓は彼らの肺から出る目に見えんばかりの息が当って、両手一杯の重い砂を表面に投げつけたかのようにギシギシときしんで今にも碎けそう」であった。これは決して歌ではなく絶対的な不協和音であり、まさしく Gewalt そのものである。このような身の毛のよだつ光景を前にして、人々が驚きと恐怖のあまり逃げ出してしまうのは、蓋し理の当然である。Veit 氏は、彼らの歌を「炎の燃えさかる地獄のどん底から、悲痛にも慈悲を求めて神の耳もとへ昇ってゆく戦慄的で不快な咆哮」と認識し、兄弟を「永遠に呪われた罪人」とか「間違いなく悪霊にとりつかれた人々」¹⁵⁾と規定する時、無意識裡に自らの本音をもらしている。彼は、自己の過去を後悔して滅却したいがために、このような認識と規定によって兄弟を暗に断罪している。これは、明らかに

15) ebend.s.223

彼の偽善性である。このために病院の管理者たちとは異なり、兄弟の「ある種の明るさ」に彼は気づかない。

Veit 氏の報告は、全て直接話法で叙述されている。彼の報告は、目撃者であるだけに実にリアルで生々しい。しかし彼の認識は、そのていねいな語り口とは裏腹に極めて恣意的である。彼の報告は、家族をもつ男としての生き方に動機づけられている。¹⁶⁾

V

僧院の院長は、自分自身の身の危険を顧ずに僧院守護のみをひたすら念じて聖像破壊をもくろむ徒輩に対して毅然としていた。彼女の「自分の生命を投げうってまでの献身」¹⁷⁾は、彼女の意識を強く規定している。

兄弟の母親が僧院に院長を訪ねた時、院長は「安楽椅子にすわり、龍の瓜に支えられた足台に足をのせて」¹⁸⁾いた。龍は、「民間信仰において宝の番人とみなされ、他方で悪、つまり悪魔と誘惑の化身」¹⁹⁾である。この龍は、院長の悪魔的な面を象徴的に暗示している。彼女は兄弟の母に、「御子息方をおそった運命は、もうどうしようもないのでできるだけ気持ちを鎮めるように」²⁰⁾と述べている。このように述べる時、彼女は自己の視角のみから判断し、兄弟の狂態については全く無関心である。²¹⁾「王侯のような婦人」²²⁾という語り手の規定は、院長の本質を的確に把えている。唯一絶対の神に奉仕する院長にとって、神への奉仕は絶対的な是であり、神をなみせんとする行動は是が非でも容認できない。彼女は、暴徒たちの企図が挫折したのは神の力に因ると考えている。

Gott selbst hat das Kloster, an jenem wunderbaren Tage, gegen den Übermut Eurer schwer verwirrten Söhne beschrmt. (227)

16) L.Hoverland,a.a.O.,s.190

17) H.Kraft,a.a.O.,s.131

18) Kleist,a.a.O.,s.225

19) H.Kraft,a.a.O.,s.127

20) Kleist,a.a.O.,s.226

21) L.Hoverland,a.a.O.,s.191

22) Kleist,a.a.O.,s.226

院長は、兄弟の行動を「思い上がり」と認識し、兄弟を「ひどく頭の混乱した息子たち」と規定している。神への奉仕を阻止せんとする人々は彼女にとって敵対者であり、またその行動は暴挙でしかない。「神が僧院を守護した」という認識は絶対的なものであり²³⁾、院長の認識の一面性を端的に物語っている。彼女は事件の当日誰がオーケストラの指揮をとったのかわからない。彼女は、尼僧アントニアは演奏の間意識不明の状態で病臥していたという証言を出した後で、「彼女の看護に配置された一人の尼僧は、大聖堂で聖体祝日の祝典が行われた午前中片時も彼女のベットの側から離れなかった」²⁴⁾と述べている。これは奇怪なことではあるが、アントニアが同夕他界したので、事の真相はわからない。当日の指揮者やアントニアの死は、院長にとって明らかに副次的な問題である。院長はこの件に関心がなく、判断をより高位の人々に委ねている。

Auch hat der Erzbischof von Trier, an den dieser Vorfall berichtet ward, bereits das Wort ausgesprochen, das ihn allein erklärt, >nämlich, daß die heilige Cäcilie selbst zu gleicher Zeit schreckliche und herrliche Wunder vollbracht habe< ; und von dem Papst habe ich soeben ein Breve erhalten, wodurch er dies bestätigt. (227)

トリーアの司教は、「聖ツェツィーリエが、自らこの恐しくもすばらしい奇跡を成就した」と述べている。聖ツェツィーリエとは、Jacobus de Voragine の『黄金伝説』の中の聖女であり、異教徒の中にあつて強い信念をもってキリスト教を信奉し、多くの異教徒を説諭によって改宗させた後、殉死している。彼女は健全な女性で、決して何かを絶対化することはなく、また院長のように組織的基盤に立脚してはいない。彼女は、ひとり自己の信念と判断のみに依拠しており、院長とは好対照をなしている。院長は、司教の宣告を肯定した後で「法皇からたった今、この件を説明する小勅書を受けとったばかりです」と述べている。ここにはおおよそ論理性はない。院長は、宗団というヒエラルヒーの中の一つの操り人形に他ならず、神の下僕として聖なるものを求める志向性はいささかも感じられない。また司教や法皇の判

23) L.Hoverland,a.a.O.,s.191

24) Kleist,a.a.O.,s.227

断は極めて独断的で、院長と同様に宗団という組織を維持するために手段を選ばない。これはまさに宗団という組織の Gewalt であり、ここには真理や聖なるものの存在する余地は残されていない。

院長の報告は、宗団維持という強い目的意識で貫かれているために、彼女の身命を惜しまぬ努力にも拘らず、極めて一面的である。それは、自己の独善性と宗団の偽善性及び組織的な Gewalt を、彼女の意図とは裏腹に明白に露呈している。

VI

当該作品に設定された時間はおよそ60年であるが、6年という時間の枠内で人々の意識は変化している。また60年の枠で状況も大きく変わっている。ここでは人々の意識と状況の変化について仔細に考量してみよう。

アーヘンの市を統治している皇帝の士官は、法皇政治と敵対して秘かに新しい教義に心を寄せていたので、院長の僧院保護の要請を巧みな口実をもうけて拒否した。しかし祭典の当日ミサ曲の演奏が終わった時、「皇帝司令官の命令によって何人かの者に逮捕令状が出され、騒乱の罪を敢えて犯した数人の瀆神者たちは衛兵によって逮捕連行」²⁵⁾されている。司令官の意識は、事件の前後で全く逆になっている。

Veit Gotthelf 氏は、聖像破壊運動に直接関与した人である。彼は、その後父の家業を継ぎ、結婚して数人の子供をもうけている。彼は内心過去の無謀を後悔し、秘かにその発覚を恐れている。そして、自分を暴挙に巻きこんだ兄弟を暗に断罪している。彼の意識も事件の前後で逆変している。

二人の意識は同じように変化している。二人は当初、新しい教義に心酔していた。ところがその後、いとも簡単に心酔した教義を放棄している。これは、新しい教義が二人の意識の中で血肉となっていなかったことを意味する。二人はともに、本来聖なるものへの志向性をもった人々ではなく、世俗的な生を求めていただけにすぎない。

事件前の四人の兄弟は快活な青年で、アーヘンの市ではなやかな社交をくりひろげていた。しかし事件の後で言語を奪われ、四肢はこわばりまるで操り人形のようなものである。彼らは、苦行僧同然の生活を送り、狂態であるとは言

25) ebend.s.222

え自分たちのことを幸福であると思っている。彼らは、まさに「キリストの真正の弟子」²⁶⁾であるかのような印象を与える。彼らは老年まで生き、「習慣に従ってもう一度栄光譚を歌った後で、明るい満ち足りた死」²⁷⁾をとげている。彼らは、狂態に陥ってから明るい光の中をすみかとしているかのようなのである。

兄弟の母親は、事件の真相に迫る唯一の人物である。彼女は、いろいろな人々の報告を受けて息子たちの狂気の原因が音楽の力であると認識する。彼女は、グロリアの譜面を眺めているうちに音楽の力に圧倒されて全能の神の前にひれ伏し服従したいという気持ちになり、その一年後「カトリック教会の懷に帰って」²⁸⁾いる。

兄弟と母親は生来新教徒であったが、正気と狂気の差こそあれ新教から旧教へ改宗している。兄弟は、狂ってはいるもののまるでイエス・キリストの真正の弟子のようである。彼らの老年を迎えての明るい満ち足りた死は象徴的であり、正気であった時の彼ら自身を否定しているかのようなのである。一方母親は大人しい女性で、大きな変革に加担するような性格の持ち主ではない。彼女は、自らを心服させるものに唯々諸々と従う平凡な一市民であり、最も深い心痛を受けた被害者である。あまつさえ彼女の努力が悉く無に帰しているだけに、彼女の改宗はごく自然な感情であるように思われる。

僧院の院長は、自己の立場と役割を十分自覚した存在であり、その意識に矛盾も分裂も全くない。彼女は、自己の職務を全うするために身命を賭して粉骨碎身している。彼女の努力は結実し、暴徒の群れを四散させて僧院は安泰である。また皇帝の士官や Veit 氏は自らの無謀を後悔して権威の前におののき、四人の兄弟は狂態にある。母親が訪ねた時、僧院は隆盛の極にあり、院長は「王侯の貴婦人」さながらに、まばゆくきらびやかで威風堂々とした感がある。彼女は、兄弟の母親をも権威と力で旧教に改宗させている。彼女は、いかなる敗北をも喫したことのない唯一の勝利者である。しかし、彼女の努力や彼女の属する宗団という組織の他面での問題性を、運命は決して見逃さない。兄弟の運命とは対照的に、僧院は「ウエストファリア条約の一項によって国有化」²⁹⁾されてしまう。ここで謂う国有化とは、教会領地及び財

26) L.Hoverland,a.a.O.,s.193

27) Kleist,a.a.O.,s.228

28) ebend.

29) ebend.s.219

産の没収である。ここにおいて院長の努力は完全に水泡に帰してしまい、その存在すらも徹底的に否定されている。院長や宗団の Gewalt は、運命の Gewalt によって否定されている。Gewalt は Gewalt で否定されることによって勝者は全くいなくなり、全てが相対の相の下に置かれている。クライストは、このような予測もつかない苛酷な運命の転変をいみじくもすばらしい形象で語ることを忘れない。

..., und (sie) konnten, wenn sie sich mühsam erhoben, durch die Öffnungen der Bretter hindurch von dem Inneren nichts als die prächtig funkelnde Rose im Hintergrund der Kirche wahrnehmen. (225)

普請中の教会の板のすき間から、華麗に輝く窓バラが垣間見えている。バラは、キリスト教世界において天上のバラの象徴であり、またバラは愛のとまる所で、そこで天使や聖者は慈愛を伝える。³⁰ この窓バラは聖なる世界の象徴である。バラは、僧院の一面をあらわしている。しかし、クライストの罔眼は他の一面も見逃さず、バラと同時に運命の Gewalt を予兆させるような暗い形象を並置する。

Dabei stand ein Gewitter, dunkelschwarz, mit vergoldeten Rändern, im Hintergrunde des Baus;... (225)

陽を浴びてきらびやかに輝く窓バラとともに、聖堂の背後に金色に縁どられた暗雲がわだかまって雷鳴をとどろかせ、聖堂の方へ稲妻を走らせている。この日は晴天にも拘らず、明るい光に暗雲がつきまとっている。この暗雲は、突然大きく広がっていつ何時でも陽の光を遮蔽しかねないような印象を与える。バラと暗雲という形象は、運命の明暗両面を象徴的に示唆している。

事件、兄弟の発狂、人々の意識の変化、母の改宗、僧院の国有化、これらは全てバラと暗雲の形象に収れんされる。誰も運命を予見できず、運命に翻弄され、結果として全てが相対の相の下に置かれている。しかし四人の兄弟だけは、否定を通して狂態にあるにも拘らず、かすかではあるが鈍色の聖な

30) H.Kraft,a.a.O.,s.219

る光芒を放っている。運命は、この兄弟のみにかすかに微笑しているかのようである。

VII

当該作品のタイトルは、『聖ツェツィーリエ、あるいは音楽の力』となっている。聖ツェツィーリエは、異教徒の中にあつてキリスト教を篤く信奉し、確固とした信念の下に幾人もの異教徒を力ではなく説諭によって改宗させた。彼女は、聖なるものを求めての苦闘の末殉死した聖徒である。当該作品において、聖ツェツィーリエは尼僧アントニアと同格視されているが、その立場や役割から見るとこれは牽強付会にすぎない。むしろ同格視されるべき立場にいる人物は、僧院の院長であるが、彼女は聖ツェツィーリエとは似て非なる存在である。聖ツェツィーリエに比肩できる存在は、作品中には登場していない。一方音楽の力は、Gewalt、つまり調和的であると同時に破壊的でもある魔性の力のことである。音楽は、宗団という組織を維持するために重要な役割を果たしている。そして宗団の高位の人々によってのみ合目的に利用されている。音楽は、宗団の中にあつては調和と団結を生み出し、宗団の外では破壊的な作用を及ぼしている。このように理解すると、聖ツェツィーリエか音楽の力かという問いに対する答えは、端的に言うとそのどちらでもない。聖ツェツィーリエと音楽の力とは対立する二つの極であり、作品世界はその両極の間である。前者は宗教に殉じた人々の世界で輝く聖徒であり、僧院は市門の外に位置し、両者とも市民生活からは離れている。このような作品世界を根源において支配しているのは、運命の Gewalt である。この力によって、全てが相対の相の下に置かれている。作品の主たる登場人物は、この運命の Gewalt を無意識裡に感じとっている。Veit 氏と院長に代表される報告者たちは、決して真相に迫ろうとせず自己の立場を弁護するにとどまっている。また人々の発想を包括する媒体も何ら存在しない。これは、まさに混沌と絶望の世界である。このような状況にあつて、運命に正対しているのは、母親と狂態にある兄弟である。母は、最も大きな心痛を受けながら、自らの意志で本来ならば敵対すべき旧教に改宗している。彼女は、聖ツェツィーリエに最も近い存在ではなからうか。また、四人の兄弟はかすかな光を放っているように見える。兄弟の放つ微光の中に希望があるとは毫も言い切れないが、真に聖なるものはこのような状況においてしか啓示されないの

かも知れない。兄弟の姿は、混沌と絶望の中で全ての制約から自由な人間本来の自然な姿なのかも知れない。このように理解すると、作品世界はにわかには現代性をおびてくる。当該作品が書かれた時期のプロイセンは、ナポレオンの圧政に屈した結果改革につぐ改革のために動乱状態にあった。政府の政策に批判的な批評紙は、厳しい検閲を余儀なくされ廃刊のやむなきにいたるものもあった。財政改革という政策を軸に社会が変動し、宗教の世界も決して聖域ではありえなかった。このような雰囲気は、冒頭で述べたように当該作品の第一稿に如実に反映している。このような状況において、全てが時代のうねりに翻弄され、社会における安定した基軸は存在しない。しかも合理的思考において不合理が力を得ている。これは、まさに現代社会のひな形であり、バラと暗雲の形象が予示する混沌の世界である。クライストは、16世紀の宗教改革と反宗教改革という激しい嵐の吹きすさんだ時代を背景に、「聖徒物語」という枠組みに仮託して、混沌における生の諸相を沈着冷静な筆致で巧みに描出しているように筆者には思われるのである。